

依存症患者のセルフスティグマと断酒期間の関連について

○職員 A（作業療法士）¹⁾ 職員 B（作業療法士）²⁾

医療法人耕仁会札幌太田病院 1)2) 作業療法・音楽療法課

【はじめに】

何らかの疾患に対する偏見や差別的な態度のことをスティグマといい、中でも、自分自身への偏見はセルフスティグマと定義され、疾患回復の妨害要因になることが報告されている。それは、社会適応の阻害、治療行動の不遵守、自尊感情の低下と関連している。セルフスティグマに対する介入は、自己効力感や治療意欲の向上、地域社会への参加に繋がる。本研究では、質問紙調査と断酒期間の聴取により、依存症患者のセルフスティグマと断酒期間の関連性を分析し、今後の支援方法について検討する。

【方法】

Link スティグマ尺度を用いてアルコール依存症の診断がついたデイケア利用者 13 名を対象に質問紙調査と断酒期間の聴取を行った。本尺度は 12 項目からなる質問票であり、精神的治療を受けたことのある人を見下げたり差別したりする態度を測定する。合計得点が高いほど、スティグマが高いことを表す。下津らは、合計得点が 30 点以上をスティグマについて意識が高まっていると報告している。尺度の点数と断酒期間の 2 つのデータを比較し、関連や傾向を分析した。

【結果】

回答人数は 13 名であった。尺度の平均は 29.4 点、最高は 37 点、最低は 12 点であった。断酒期間は最長 13.7 年、最低 1 カ月未満であった。得点分布から、13 名中 8 名が 30 点以上の得点を示し、そのうち 7 名は断酒期間が 3 年以下であった。また、断酒期間が 10 年以上の回答者は 3 名であり、うち 2 名は尺度の上限得点（48 点）の半分である 24 点以下であった。

【考察】

今回の研究で、セルフスティグマが高い人は断酒期間が短い傾向にあるという結果が得られた。このことから、セルフスティグマは積極的な治療行動や再発予防を妨げ、断酒の継続を阻害する一因になることが考えられる。スティグマ軽減に効果的だとされているのは、精神疾患を経験した当事者同士の交流や成功体験の蓄積による自己の肯定的認識ということが報告されている。しかし、セルフスティグマの高さから治療意欲、自己効力感が低下し、他者との繋がりを自ら遮断した結果、コミュニティに参加できず孤立し、飲酒に繋がってしまうのではないかと考える。作業療法士として、依存症患者同士の集団作業活動の中から成功体験の機会を提供することで自己効力感の向上とコミュニティへの参加を促すことができ、セルフスティグマの軽減に繋がるのではないかと考える。また、断酒の継続には飲酒以外のストレス対処法を確立していくことも重要であるため、その人にとって意味のある作業の探索にも力を入れていきたい。